

一般シンポジウム

徹底討論！ 多職種連携教育 (IPE) は薬学教育に何をもたらすのか

オーガナイザー／杉林堅次 (城西大学薬学部)、石井伊都子 (千葉大学医学部附属病院薬剤部)

超高齢社会が進む中、医療、介護、福祉の連携の充実が叫ばれるようになり、多職種連携教育 (IPE) を導入する大学が増えている。このシンポジウムではIPEに取り組む大学の事例を取り上げ、IPEの薬学教育への影響についての可能性を探った。

城西大学薬学部の細谷治氏は「英国では1990年代に医療事故を防止するために、連携教育が盛んになり、チーム医療の重要性が再認識された。チーム医療は言い換えれば専門職連携実践 (IPW) ということになり、IPWを効果的に行うためには、それらに求められる知識や態度を身につけるための教育すなわちIPEが重要となる」と指摘し、埼玉県立大学、埼玉医科大学、日本工業大学工学部生活環境デザイン学科と連携して取り組んでいる「彩の国連携力育成プロジェクト」を紹介。そして細谷氏は「意見衝突があったとしても、学生は同じ目標を持っていると、それぞれの意見をうまく受け止める環境が比較的短い時間でできるようだ。それによって互いに安心感が生まれ、ディスカッションがさらに深く進めることができた」と実習で得られた成果を説明した。



細谷 治氏

昭和大学薬学部の木内祐二氏は、同大学で取り組んでいる体系的、段階的なチーム医療教育カリキュラムを紹介。例えば、5年次の1週間の病棟実習では、患者本人やスタッフなどから情報を収集し、夕方にはプロブレムマップを書いて患者情報をまとめるミーティングを行う。これを毎日繰り返し、最後には指導スタッフも同席した発表会を開催している。木内氏は「はじめのうちは薬学部の学生は薬の説明のみに終始していたのですが、1週間経過すると、ほかの職種の意見も参考にして、生活に基づいた薬物治療を意識するようになった」と教育効果を示した。



木内 祐二氏

筑波大学地域医療教育学の前野哲博氏は医師の立場から、「薬というくくりの中で他の職種と連携することは重要であるが、医療ニーズが高度・複雑化し、医療資源が限られた状況においては新しいスキルが必要になってくる。例えば、生活習慣の改善が必要な場合は、運動療法や食事療法などの提案が必要になる。また、高齢者の社会参加を促すためには、老人会



前野 哲博氏



オーガナイザーの杉林堅次氏 (左) と石井伊都子氏

やクラブなどの情報を提供することもこれからの薬剤師には求められている」と指摘した。さらに前野氏は、診断というと抵抗を持たれる方も多いが、OTC薬を販売すること自体すでに判断が伴っており、受診勧奨を行うか否かのトリアージをして、医療機関と連携を図り、一人ひとりのニーズに合わせた医療を提供することも重要だと説明し、薬剤師向けの臨床推論を習得するためのプログラムを紹介した。

千葉大学大学院看護研究科の酒井郁子氏は、1～4年次に実施している亥鼻IPEについて紹介。3学部の子学生の学習状況を経年で比較したところ、プログラムを通じて、学部間の格差がなくなってきたことを評価した。その中で薬学生は自己評価に厳しいものの、チーム医療の在り方について自分なりにじっくり考えてレポートしている傾向があったという。また、専門職教育を行うことで、他学部の学生に対して薬剤師の理解が進み、多職種を理解する気持ちが芽生えたのではないかと説明した。



酒井 郁子氏

ユニバーシティカレッジロンドンの薬学部にあるFIPコラボレーションセンターに所属する荒川直子氏は、世界のIPEとそれに関連する国際的な活動について紹介した。医薬品を安全に使用するには、薬剤師のコラボレーティブプラクティス (多職種連携実践) が不可欠であると指摘。薬学教育にIPEを導入することが国際的な流れであり、先にWHOが発表した「医療従事者教育のためのガイドライン」にも明記されていると説明した。FIPではIPEに関するセッションなどを行い、各国の取り組み状況や問題点を共有しているが、IPEが医療提供過程や患者の健康にどのように貢献しているのかといったエビデンス不足が課題になっていることを説明した。



荒川 直子氏